

出率はほかの総菌数およびグラム陰性菌数の検出部分のそれに劣る。

2. 総細菌数およびグラム陰性菌数の成績の正確性、再現性、細菌尿検出率はかなりよい結果を得た。しかし、

緑膿菌の場合には総菌数検出部分の精度はよくない。

3. 本法は簡便な検査法であり、細菌尿のスクリーニング検査法として利用しうる。

尿路感染症に関する研究

国立病院医療センター小児科 山口 正 司

葛 秀 樹 新 居 美 都 子

魚 住 建 松 下 竹 次

I. 当院小児科における尿路感染症の頻度

尿路感染症の診断基準は、1) 尿培養により2回以上の有意細菌尿($10^5/ml$ 以上)、2) 膿尿、1視野5個以上(400倍)、3) 臨床的に発熱、排尿痛、腎部痛、頻尿、赤沈促進など、のあるものを確実例とした。膿尿、細菌尿はあるが有意細菌尿でない $10^4/ml$ 以下のものは疑い例とした。

昭和51年

	確実例	疑い例	計
外来(新患)	2,798 18(0.64%)	7(0.25%)	25(0.89%)
入院	439 1(0.24%)	2(0.46%)	3(0.68%)
新生児	614 9(1.47%)	3(0.49%)	12(1.95%)

昭和52年

	確実例	疑い例	計
外来(新患)	2,824 17(0.60%)	11(0.39%)	28(0.99%)
入院	433 5(1.15%)	1(0.23%)	6(1.38%)
新生児	713 7(0.98%)	1(0.14%)	8(1.12%)

某女子施設での尿路感染症(疑い例を含む)は

幼 児	69例中2例 (2.90%)
小学生	118例中4例 (3.39%)
中学生	45例中1例 (2.22%)
高校生	9例中0例

当院小児科における尿路感染症は従来の報告に比べて少ない傾向がみられた。

II. 尿路感染症で入院精査した24例について

1) 尿培養で起炎菌と考えられたもの

E. coli 16例 Enterococcus 4例

E. coli+Klebsiella 3例 Klebsiella 1例であった。

2) VUR、新生児を除き検査し得た14例中6例に認めた。

3) 免疫検査

a) 血清 IgG、24例中異常値を示したものはなかった。

血清 IgA 異常高値を示したもの24例中1例(4.16%)

〃 低値 〃 24例中1例(4.16%)

血清 IgM 〃 高値 〃 24例中5例(20.8%)

〃 低値 〃 24例中3例(12.5%)

血清 IgE 〃 高値 〃 24例中4例(16.7%)

b) T-cell 4例中1例が低値を示した。

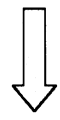
B-cell 〃 1例が低値を示した。

c) NBT 4例中3例が高値を示した。

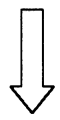
d) PHA による末梢血リンパ球幼若化率

4例共正常範囲にあった。

以上例数が少ないので議論をなし得ないが、今後尿路感染症の免疫機能について研究する予定である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



. 当院小児科における尿路感染症の頻度

尿路感染症の診断基準は,1)尿培養により 2 回以上の有意細菌尿(10⁵/ml 以上),2)膿尿,1視野5個以上(400倍),3)臨床的に発熱,排尿痛,腎部痛,頻尿,赤沈促進など,のあるものを確実例とした。膿尿,細菌尿はあるが有意細菌尿でない10⁴/ml 以下のものは疑い例とした。